

国語

試験日 二〇二〇年二月四日(火曜日)
開始時刻 午後一時
終了時刻 午後二時

注意事項

- 一、この冊子は十八ページです。落丁、乱丁、印刷の不鮮明などがあつた場合には申し出て下さい。
二、解答はかならず解答用紙(マークシート)の指定されたところの番号をマークしてください。
三、解答用紙の受験番号欄には、かならず受験番号(七ケタ)を記入し、その番号をマークしてください。
四、解答用紙への記入は黒鉛筆を、解答を消す場合は、プラスチック消しゴムを使用してください。
五、解答用紙は試験が終了したら、かならず提出してください。
六、試験室内で配付された問題用紙は、持ち帰って結構です。

一

次の文章を読み、後の問に答えなさい。なお、設問の都合上、表記を改めたところがある。

古池や蛙飛び込む水の音

明治期に正岡子規がこの句を「ありのまま」を詠んだものだ、[A] 古典を参照する必要はないとして以来、現代でもそう解釈するのがふつうになっている。しかし江戸時代は必ずしもそうではなかった。芭蕉没後百年ほどして石河積翠は芭蕉句の注釈の集大成ともいえる『芭蕉句選年考』を編んだ。彼は古池の句の注で西行の「心なき身にもあはれは知られけり鴨立つつ沢の秋の夕暮れ」を先行作としてあげている。これは何を意味するのだろうか。芭蕉が歌人の中では西行をもっとも尊敬していたこと、また西行自身がこの歌を自分の代表作とみなしていたという逸話(『井蛙抄』)が知られていたことを考え合わせると、芭蕉の「古池や」の句は西行の歌の[ア]ではないかとの解釈が成り立つ。つまり西行の代表作が語ろうとした内容の本質をそのままに、表面を「俗」な言葉で語り直し、それを自分の代表作にしたということである。具体的には、西行の歌の「鴨」を「蛙」に、「沢」を「古池」に、飛び「立つ」を「飛び込む」に置き換えたものと見るのである。この操作によって山中の古雅閑寂な光景は江戸市民の生活に見馴れた光景となる。[B]「雅」の歌は「俗」の句となる。けれども、その光景が意味するものは変わらない。それはやはり「心なき身にもあはれを知ら」せるものである。古典が作り上げた雅の世界を、当代の日常という俗世界から題材や言葉を選んで作り直すこと。これが芭蕉のこつた風流(芭蕉の言葉では「風雅」)俗化の戦略であった。

[C] 古典を書き直すだけが芭蕉の仕事ではない。彼の視線は目の前の自然のありようへと向かう。そして新しい風雅を発見し、これを言葉に定着させようとした。芭蕉は死の二年前、終生のバトロンであった杉山杉風へ手紙を出した。そこに「日ごろの工夫の成果です」と報告して次の句を記している。

一

鶯や餅に糞する縁の先

芭蕉はいったい何を工夫していたのか。それは古典世界の風雅とは異なる自然との出会いを、江戸の庶民の日常生活の中に発見して、新しい風雅として世に知らせることである。日本の和歌には梅に鶯がしばしば取り上げられてきた。その結果「梅と鶯」は風雅なものとして、文学や絵画や工芸品などに登場する。しかし芭蕉は世間の実生活のなかの鶯を捉えよとした。[D] まだ誰も言葉にしたことのない鶯の姿。

芭蕉は見馴れた世俗の日常を、新しい目で見直すことを試みたのである。古典を慕う歌人たちが梅に鶯とて[イ]に囚われているとき、芭蕉は意図的にそれを離れて、まだ誰も捉えなかったことのない日常の中の「瞬間」を切り取った。しかもそのスナップ写真は、同時代の誰も「あるある」と納得できるイメージでなければならぬ。当時正月の餅はカビを取るため縁側で天日に干す習慣があつた。それは庶民に親しいうらかな春の光景である。そこへ突如鶯が飛来し、あつと思ふ間もなく糞を落とす。のどかな日だまりの餅は鶯の登場によって一瞬にして惨事となる。ここには俳諧特有の意表をついた滑稽があるけれども、もはやあの「雅」が「俗」に引きずり下ろされるパロディではない。「雅」のイメージをひきずる鶯と「俗」の極みともいえる糞とが、一つになってのどかな「俗」の日常を作り出しているのだ。

最終的に芭蕉は山中の隠者になる代わりに旅人という生き方を選んだ。「野ざらし紀行」というタイトルはのたれ死にを覚悟しているし、運べる荷物だけを全財産としたその姿は隠者よりも貧しい。けれども清貧を誇るのではなく、[ウ]。たとえ「奥の細道」に「黄頭馬の尿する枕もと」という句がある。芭蕉は座敷に寝ていたはずだからこれは実体験ではないと言ふ人もいるが、そういうことは問題ではない。「旅人」とは中国的隠者のように仙人に通じる道ではなく、[E] 瘠くて臭い生活を日常とするものであることを告げているのだ。また自分がその生活を受け入れていることを伝えているのだ。これが彼の風雅の生活なのである。この句は、彼の風雅が俗のただ中にあることを示している。それはこれまでの古典的雅の世界ではできなかったこと、いや考えもしなかったことだ。芭蕉は世俗の生活にとまらながらも、日々移りゆく自然をまるごと受け

入れるなら、そこには先人たちが「風雅」と呼んだものの本質が見えることを信じていた。それは空想的な「雅」の世界にあつた風流を、現実の「俗」の世界に再発見することであつた。別の言い方をすれば、風流は想像の中で追体験するものではなく、生活の中で実体験するものになつたのである。

〔尼ヶ崎彬「いきと風流——日本人の生き方と生活の美学」より〕

問一 空欄[A]～[E]に次の①～⑥の語をすべて一度だけ用いて補ったとき、空欄[B]、[D]に入る最適な語を選び、その番号をマークしなさい。解答欄はBが [1]、Dが [2]。

- ① つまり ② だから ③ むしろ ④ しかも ⑤ もちろん

問二 傍線部(1)「江戸時代は必ずしも『俗』ではなかつた」とあるが、「江戸時代」にこの芭蕉の句はどのように考えられているのか。その説明として最適なものを選び、その番号をマークしなさい。解答欄は [3]。

- ① 江戸時代は、単に表面的に眺めているだけでなく、古典作品として遇して味わうべきであると考えられていた。江戸時代は、単に目の前で起こることを詠んだものとして解釈するのではなく、西行の代表作を踏まえて理解すべきであると考えられていた。
- ② 江戸時代は、単に句を文学的に解釈するのではなく、市民の生活に即して読み取るべきであると考えられていた。
- ③ 江戸時代は、単に俗の世界を描いた句としてではなく、雅の世界を描いた句として読むべきであると考えられていた。
- ④ 江戸時代は、単に芭蕉の一つの作品としてではなく、芭蕉の代表作として解釈すべきであると考えられていた。

— 3 —

— 2 —

問三 空欄アに当てはまる最適な語句を選び、その番号をマークしなさい。解答欄は 4。

- ① 率先垂範
- ② 同工異曲
- ③ 面目一新
- ④ 換骨奪胎
- ⑤ 阿諛追従

問四 傍線部②「日ごろの工夫の成果です」とあるが、どのような工夫をしたのか。その説明として最適なものを選び、その番号をマークしなさい。解答欄は 5。

- ① 「梅と鶯」という現実の世界の描写ではなく、「鶯と鶯」という虚構の世界を描写した。
- ② 「梅と鶯」という自然を用いた題材ではなく、「鶯と鶯」という生活に密着した題材を用いた。
- ③ 「梅と鶯」という古典的な主題ではなく、「鶯と鶯」という現代的な主題になるように作った。
- ④ 「梅と鶯」という月並みな取り合わせではなく、「鶯と鶯」という斬新な取り合わせを行った。
- ⑤ 「梅と鶯」という趣のある内容ではなく、「鶯と鶯」という面白おかしい内容の句にした。

問五 空欄イに当てはまる最適なものを選び、その番号をマークしなさい。解答欄は 6。

- ① 紋切り型の美的イメージ
- ② 切り口上のな「雅」のイメージ
- ③ 手垢のついた「俗」のイメージ
- ④ 中途半端な絵画的イメージ
- ⑤ ステレオタイプの日常のイメージ

問六 傍線部③「意表をついた」の意味の説明として最適なものを選び、その番号をマークしなさい。解答欄は 7。

- ① 琴線に触れること。
- ② 望外なること。
- ③ 真相に迫ること。
- ④ 核心を捉えること。
- ⑤ 予期せぬこと。

問七 傍線部④「旅人という生き方」とあるが、それはどのような生き方か。その説明として最適なものを選び、その番号をマークしなさい。解答欄は 8。

- ① 世俗を捨てることなく風流を実践するような生き方。
- ② 風雅な貴族ではなく世俗的な庶民のような生き方。
- ③ 中国的な隠者ではなく日本の隠者のような生き方。
- ④ 文学を離れることなく観念的な生活を送るような生き方。
- ⑤ 貧しさを嫌うことなく生活を楽しむような生き方。

問八 空欄ウに当てはまる最適なものを選び、その番号をマークしなさい。解答欄は 9。

- ① 日常の生活という現実が目に見える
- ② 風雅な生活という現実を目を凝らす
- ③ 風流な生活という現実が目がくらむ
- ④ 贅沢な生活という現実から目が覚める
- ⑤ 世俗の生活という現実から目をそむけない

問九 本文の内容に合致するものとして最適なものを選び、その番号をマークしなさい。解答欄は 10。

- ① 俳諧は世俗的であることが重要なので、芭蕉のように日常生活から題材を取って作品を詠まなければならない。
- ② 正岡子規が「古池や」の句を「ありのまま」に詠めばよいのだと言ったことで、この句の評価が上がった。
- ③ 芭蕉は、見馴れた日常の中に、人々が気づくことのできる、新しさを持った作品を作ろうとした。
- ④ 西行を師として仰いでいた芭蕉は、西行が描いた風雅の世界を描きたいと思ひ、旅人として暮らしていた。
- ⑤ 江戸時代は古典的な風流の世界が俗化されつつあり、俳諧も俗な日常生活を詠むことが中心になっていた。

二 次の文章を読み、後の問に答えなさい。なお、設問の都合上、表記を改めたところがある。

ひとの認識には影がつきものだ。ひとは世界を、社会を、いつもいま、ここから見ることはできないのだから。そこには、見えるものの影になって見えなくなるものがある。ある時点で過去を振り返るとすれば、過ぎ去った膨大な記憶からある何かを選択するしかない。そこでは想起されなかった無数の出来事が「ア」に沈む。

17世紀の哲学者、スピノザは、「光が影を顕わす」と書いた。光が当たると影もできる。光がなければ影もできない。

見えないのは影になっているものだけではない。「A」というように、見る者は見ているおのれ自身を見ることは能わぬ。いくら場所を移してもこれは変わらない。そういう限界をもちつつ、ひとは世界を、社会を、さまざまの出来事を見てきた。見てこなかった。そう、盲点というのが、認識にも想起にもかならずある。

「かたる」という日本語がよく示しているように、世界について何かを「かたる」のは、語る、ことであると同時に騙る、ことである。「誰かを騙る」ということはあるように、騙るとはなりすますこと、偽ることである。だから、思い出を語ることも騙りがつきまとう。

記憶は刻まれることも、選ばれるものでもある。何かを憶えているというのは、図として浮き上がるものと、地として背後に沈められるものに、それと意識されることとを区別されるということである。そういう操作を経たものとして、ひとの記憶はある。たとえばじぶんの過去。じぶんがこれまで経てきた遠く、体験してきたことについて、ひとは切々と語るが、それもほとんど騙りに近い。

記憶というのは、甘美なものも多いが、苦いもの、痛いものはさらに多い。いまなお納得できていない扱いか、じぶんに深い傷を残したままの仕打ち、あるいは棄てられた体験とかは、ずいぶん時が経ったはずのいまも不意にじくじくと疼きだして、こころを波打たせる。そういうさわだつた体験に沿ってじぶんの過去を語りだしてゆくうち、わたしが体験したはずのそ

れ以外の無数のとりとめもない出来事は、かき消されたり、背景に押しやられたりして、じつさに体験したとはずいぶん違った **イ** 立ちになる。そうした語りをくりかえしているうち、過去の傷はじつよりうんと膨らんでくる。そうしてわたしは「悲劇の主人公」になる。

記憶は時とともに消えゆきもするが、このようにどんどん膨らみもする。だから、**ウ** に迫る記憶も、それを編む「物語」という糸を抜けば、存外ありふれた体験だったということがよくある。(物語)として編まれていることがなければ、記憶とは、思いのほか、消え入りやすいもの、隠されやすいもの、歪みやすりものである。それほどビジャクなものである。

他方で、記憶は、消えうにも消せないものでもある。からだに染みついて拭い切れないもの、そう意識に上ることなくからだの奥深くにまで沁みてゆくものである。そして思わぬときに疼きだし、消えうにも消え去ってくれないものである。記憶の痛みには、**Ｂ** 疼くものときりぎり刺すもの、疼きと**激痛**の二つがある。

過去に受けた深い傷はいつまでも**Ｂ** 疼く。ここで疼きは、いつまでも過去のものとなつてくれずに、ふとしたはずみにしつこく首をもたげる。それとの向き合いを強いられたつづけるなかで(わたし)というものがたちづくられる。

これに対し、**激痛**はそういう向き合いそのものを不可能にする。**激痛**は、ひとを時間の一点、空間の一点に閉じ込めるからだ。ひとの意識はその痛みの瞬間に貼りつけられ、そこから身を剥がすことができない。いいかえると、痛みに苛まれて、痛んでいるこの「いま」の前へと、あるいはその先へと思いをなびかせることができない。思い出に浸ることも、未来に思いをはせることもできないのだ。時が、いつてみれば庭を失つて、点になる。苦痛のなかで、ひとは「いま」に閉じ込められる。**激痛**はおなじように、ひとを「こ」へ閉じ込めさせる。からだは、痛みその一点へと内向して、もはやまわりの世界へのびやかに開かれることがない。他人の言葉を懐深く迎え入れたり、他人の心境に遠く思いをはせる余裕もなくなる。ここで

は、(わたし)は痛みそのものと化してしまい、**じぶん**というものに距離がとれない。痛みがうんと奥まり、ひとはただひたすらそれを独りで耐えぬくしかない。だれも代わりに痛んでくれはしないからだ。

九鬼周造は江戸の芸者のことばとして、フランス語で書かれたある随想のなかでこんな台詞を引いていた——「Je ne me souviens point de toi, car je ne t'oublie jamais」(坂本賢三はこれを「忘れねばこそ思ひ出さず候」と訳している)。これもまた**激痛**、こころの**激痛**の一つである。

だからこそ、西洋の哲人たちは古来、sympathyとかcompassionとかいった「共感」の必要を説いてきたのだろう。「苦しみ (pathos) をともにする」という心はせである。何かを「思ひ出す」ことができるためには、**か**がえ込んだ**激痛**を腸でわずかでも吸い込み、軽くしてやる、そんなマラソンの伴走者のような支えが必要ということだ。

(鷲田清一「濃霧の中の方向感覚」より)

問一 空欄 **ア**、**イ**、**ウ** に入る漢字の最適な組み合わせを選び、その番号をマークしなさい。解答欄は **11**。

- ① ア 闇 イ 面 ウ 要
- ② ア 地 イ 面 ウ 感
- ③ ア 地 イ 顔 ウ 真
- ④ ア 地 イ 面 ウ 要
- ⑤ ア 闇 イ 顔 ウ 真

問二 空欄 **A** に入る最適なものを選び、その番号をマークしなさい。解答欄は **12**。

- ① 目から鱗が落ちる
- ② 井の中の蛙大海を知らず
- ③ 燈台下暗し
- ④ ひとを見かけによらぬもの
- ⑤ 朱に交われば赤くなる

問三 傍線部(1)「ほとんど騙りに近い」とあるが、それはなぜか。その説明として最適なものを選び、その番号をマークしなさい。解答欄は **13**。

- ① 語る内容を思い起こすに際して、社会や世界の影の部分にどうしても影響されてしまうから。
- ② じぶんのことについては冷静に語る事ができず、じぶんのことを良いように語ってしまうから。
- ③ すべての出来事を語る事ができず、語る内容を無意識のうちにふるいにかけているから。
- ④ 記憶はそれぞれ個人に独自のもので、一般的な評価とはかならずしも一致するものではないから。
- ⑤ 時間の経過とともに都合の悪いことは忘れてしまつて、良いことばかり語ってしまうから。

問四 傍線部(2)「わたしは「悲劇の主人公」になる」とあるが、それはなぜか。その説明として最適なものを選び、その番号をマークしなさい。解答欄は **14**。

- ① ありふれた体験しかしていないと自己嫌悪を覚え、ひとは現実逃避した物語を作ってしまうから。
- ② つらい過去の出来事も時間が経つと忘れてしまい、ひとは甘く心地よい物語を作ってしまうから。
- ③ 悲しく苦しい記憶はこころのなかに消えずに残っており、ひとはそれを消し去る物語を作ってしまうから。
- ④ 記憶を選別したり、脚色を加えたりすることによって、ひとは事実以上の物語を作ってしまうから。
- ⑤ 好ましいことは嫌なことよりも記憶に残りやすく、ひとはそれを用いた物語を作ってしまうから。

問五 空欄 **B** に入る最適な語句を選び、その番号をマークしなさい。解答欄は **15**。

- ① じくじく
- ② わなわな
- ③ しんしん
- ④ ひしひし
- ⑤ すきすき

問六 傍線部(3)「**激痛**」とあるが、その説明として最適なものを選び、その番号をマークしなさい。解答欄は **16**。

- ① ひとは自らの**激痛**に耐えることで、他者の痛みを知るようになる。
- ② **激痛**というものは、ひとが時間的広がりをもつことを不可能にする。
- ③ あまりの**激痛**のために、ひとは他者との関係のなかに逃げようとする。
- ④ **激痛**を一時でも忘れようと、ひとは「いま」を懸命に生きようとする。
- ⑤ ひとの感覚器官は、空間のなかでは**激痛**を感じることができない。

問七 傍線部(4)「**じぶん**というものに距離がとれない」とあるが、これはどのようなことか。その説明として最適なものを選び、その番号をマークしなさい。解答欄は **17**。

- ① 自己というものを突き放して客観的に捉えることができないということ。
- ② 自己というものを価値判断の基準として捉えることができないということ。
- ③ 自己というものを他者と似たものとして捉えることができないということ。
- ④ 自己というものを合理化し効率的に捉えることができないということ。
- ⑤ 自己というものを抽象化し単純明快に捉えることができないということ。

問八 本文の内容に合致するものとして最適なものを選び、その番号をマークしなさい。解答欄は 18。

- ① 激痛は独りで耐えるしかないが、その激痛を抜け出すためには他者による支えがなければならぬ。
- ② 過去に受けた深い傷も、時間の経過とともに忘れられ、いずれは甘美なものになっていくものである。
- ③ ひどが体験する出来事はいずれも取り立てて語るようなものではないので、いつの間にか忘却していく。
- ④ 記憶していた内容を忘れるだけではなく、記憶していたということ自体すらも忘れていくものである。
- ⑤ 〈物語〉を編み上げることでじぶんの人生を豊かにし、生きている価値を見出すことができるようになる。

三 次の各問に答えなさい。

問一 誤字を含むものを一つ選び、その番号をマークしなさい。解答欄は 21。

- ① 日本初の鉄道が敷かれ、盛大に式典が催された。
- ② 諦めることなく、再起を目指す気概は持ちたい。
- ③ 今季の最終戦に、選手全員が背水の陣で望んだ。
- ④ 不審者の侵入を防ぐために、カメラを設置した。
- ⑤ 先輩たちは、寸暇を惜しんで練習に励んでいた。

問二 誤った読み方のものをそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。解答欄は(1)が 22、(2)が 23。

- | | | | |
|-----|------------|------------|------------|
| (1) | ① 棧敷(さじき) | ② 稚児(ちご) | ③ 数寄屋(すきや) |
| | ④ 猛者(もうじゃ) | ⑤ 神楽(かぐら) | |
| (2) | ① 僅か(わずか) | ② 嘲る(あざける) | ③ 罵る(ののしる) |
| | ④ 煎る(いる) | ⑤ 賄う(わづらう) | |

問九 ④「ビジャク」、⑥「カカエ」の波線部と同じ漢字を含むものをそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。解答欄は 19、20。

- | | |
|---|-----------------|
| a | ① サンビを極めた事故現場 |
| | ② 食材をビチクする |
| | ③ 人情のキビに通じる |
| | ④ 人気がシタビになる |
| | ⑤ 生活がカビに流れる |
| b | ① 努力がスイホウに帰す |
| | ② 負傷者を手厚くカイホウする |
| | ③ 台風で崖がホウラクする |
| | ④ 傷口をホウゴウする |
| | ⑤ アンア諸国をスキホウする |

問三 慣用句として()に入る言葉が「 」にないものを一つ選び、その番号をマークしなさい。解答欄は 24。

- 【ひく・いる・もめる・きる・おむる】
- | |
|---------|
| ① 堂に() |
| ② 気が() |
| ③ 筆を() |
| ④ 白を() |
| ⑤ 奇を() |

問四 傍線部の言葉の使い方が適切でない文を一つ選び、その番号をマークしなさい。解答欄は 25。

- ① 目を奪うような惨劇が繰り返された。
- ② ぬるま湯につかっているうちにリストラの対象になった。
- ③ 彼の實力と比べたら私など同日の論ではない。
- ④ 日曜日体が空いているから、映画でも親に行こう。
- ⑤ テレビのバラエティ番組には食指が動かない。

問五 傍線部の言葉の使い方が適切でない文を一つ選び、その番号をマークしなさい。解答欄は 。

- ① こんな問題はお茶の子さいさいだ。
- ② テレビの修理なんてちよらいものだ。
- ③ あいつにはまんだだまされてしまった。
- ④ まさかだと負けてたまるものか。
- ⑤ 犯人をみすみ取り逃がしてしまった。

問六 対義語の関係になっていないものを一つ選び、その番号をマークしなさい。解答欄は 。

- ① 末尾 ⇄ 冒頭
- ② 常体 ⇄ 敬体
- ③ 辛抱 ⇄ 離伏
- ④ 介入 ⇄ 傍観
- ⑤ 簡潔 ⇄ 冗長

問七 同義語の関係になっていないものを一つ選び、その番号をマークしなさい。解答欄は 。

- ① 怠慢 ⇄ 横着
- ② 明白 ⇄ 歴然
- ③ 清廉 ⇄ 潔白
- ④ 高慢 ⇄ 尊大
- ⑤ 恣意 ⇄ 強制

問八 ①、②のカタカナの部分と同じ漢字を使うものをそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。解答欄は が が

- ④ 意気シヨウ天
 - ① 食シヨウ気味
 - ② シヨウ眉の急
 - ③ 部長にシヨウ進する
 - ④ 起シヨウ転結
 - ⑤ 外交折シヨウ
- ① 在タク介護
② 円タク会議
③ 御タク宜が下る
④ 販路の開タク
⑤ 潤タクな資金

① 名論タク説